

ウェルビーイングを目的とした英国読書協会の活動 —子ども・若者を対象としたブックリスト掲載図書の実態分析—

若栗 雛子

近年、日本において子ども・若者のウェルビーイングに対する関心が高まってきている。2009年に「子ども・若者育成支援推進法」が制定され、同法の規定に基づいて、2021年には基本的な方針の一つとしてウェルビーイングの観点が含まれた「第3次子供・若者育成支援推進大綱」が策定された。また、同年にはウェルビーイングの向上を基本理念として掲げた「こども政策の新たな推進体制に関する基本方針」も閣議決定された。

この背景には、日本の子ども・若者のウェルビーイングの低さが問題視されていることが指摘できる。2020年8月にユニセフ・イノチェンティ研究所（UNICEF Office of Research - Innocenti）が発表した報告書によると、日本は子どもの精神的幸福度が38か国中37位となっている。さらに、国立成育医療研究センターや文部科学省が実施した、小学校から高校までの児童生徒の抑うつ傾向や、小中学校生の不登校の状況についての調査では、抑うつ傾向が中等度以上の児童生徒の割合は高まり、不登校児童生徒数が増加の傾向を示している。

本研究では、こうした状況を踏まえ、子どもや若者のウェルビーイングへの関心が高まる中で、若者のウェルビーイングの向上に公共図書館を活用して取り組む、英国読書協会（The Reading Agency, TRA）の先進的な活動について研究を行った。なかでも、Reading Wellプログラムと呼称されるプログラムのReading Well for childrenとReading Well for teensという2つのスキームでは、悩みを抱える子どもや若者向けに、保健医療の専門家と協力してブックリストを作成し、公共図書館でそれらの図書を提供する試みがなされている。本研究では、そのスキームで作成されたブックリストの調査分析を踏まえつつ、その特徴を明らかにすることを目的としている。

具体的には以下の2つの調査分析を行った。(1)ブックリストに掲載された図書の特徴を書誌情報に基づいて分析する計量的調査（書誌情報はBritish National Bibliography等の記載を使用した）、(2)読みやすさ指標（Flesch Reading EaseとFlesh-Kincaid Gade level）を用いた掲載図書の読みやすさの調査である。前者では、英国読書協会が提供する子ども・若者向けスキームのブックリスト（Reading Well for children（33点）、Reading Well for teens（27点））を扱い、後者では、そのうち若者向けスキーム（Reading Well for teens）のブックリストに掲載された「Juvenile literature」の件名を付与された図書（15点）を取り上げてテキストの読みやすさを分析した。

本研究では、英国読書協会がウェルビーイングの向上を目的として、子ども・若者を対象として作成しているブックリストが持つ傾向としての特徴が、計量的調査の結果の数値を示しつつ、実証的な方法で指摘される。

（指導教員 原 淳之）